武蔵野日曜聖書講筵

ペテロとガマリエル
――使徒行伝第５章――

１９９１年４月21日
小池辰雄

ゼロ・イコール・無限大　献金は献身　キリストに帰る　無即無限無量　神の活字　徴と不思議　聖霊の行伝　天的必然が本当の自由　キリストに圧倒されて生きている　聖霊の中から無者が本当の聖徒　キリストの現実に在りて　四位一体

【使徒５】

1 然るにアナニヤと云う人、その妻サッピラと共に資産を売り、2 その価の幾分を匿しおき、残る幾分を持ちきたりて使徒たちの足下に置きしが、妻も之に与れり。3 ここにペテロ言う『アナニヤよ、何故なんじの心サタンにて満ち、聖霊に対し詐りて、地所の価の幾分を匿したるぞ。4 有りし時は汝の物なり、売りて後も汝の権の内にあるに非ずや、何とてかかることを心に企てし。なんじ人に対してにあらず、神に対して詐りしなり』5 アナニヤこの言をきき、倒れて息絶ゆ。これを聞く者みな大いなる懼を懐く。6 若者ども立ちて彼を包み、かき出して葬れり。

7 凡そ三時間を経て、その妻この有りし事を知らずして入り来りしに、8 ペテロ之に向かいて言う『なんじら此程の価にてかの地所を売りしか、我に告げよ』女いう『然り、此程なり』9 ペテロ言う『なんじら何ぞ心を合せて主の御霊を試みんとせしか、視よ、なんじの夫を葬りし者の足は門口にあり、汝をもまたかき出すべし』10 おんな立刻にペテロの足下に倒れて息絶ゆ。若者ども入り来りて、その死にたるを見、これをかき出して夫の傍らに葬れり。11 ここに全教会および此等のことを聞く者みな大いなる懼を懐けり。

12 使徒たちの手により多くの徴と不思議と民の中に行われたり。彼等はみな心を一つにして、ソロモンの廊にあり。13 他の者どもは敢て近づかず、民は彼らを崇めたり。14 信ずるもの男女とも増々おおく主に属けり。15 終には人々、病める者を大路にかききたり、寝台または床の上におく。此等のうち誰にもせよ、ペテロの過ぎん時、その影になりと庇われんとてなり。16 又エルサレムの周囲の町々より多くの人々、病める者・穢れし霊に悩まされたる者を携えきたりて集いたりしが、みな医されたり。

17ここに大祭司および之と偕なる者、即ちサドカイ派の人々、みな嫉に満
たされて立ち、18使徒たちに手をかけて之を留置場に入る。19然るに主の使、夜、
獄の戸をひらき、彼らを連れ出だして言う、20『往きて宮に立ち、この生命
の言をことごとく民に語れ』21かれら之を聞き、夜明がた宮に入りて教う。
大祭司および之と偕なる者ども集いきたりて議会とイスラエル人の元老とを
呼びあつめ、使徒たちを曳き来らせんとて、人を牢舎に遣したり。22下役ど
も往きしに、獄のうちに彼らの居らぬを見て、帰りきたり告げて言う、23『わ
れら牢舎の堅く閉じられて、戸の前に牢番の立ちたるを見しに、開きて見れば、
内には誰も居らざりき』24宮守頭および祭司長ら、この言を聞きて如何にな
りゆくべきかと、惑いいたるに、25或人きたり告げて言う『視よ、汝らの獄
に入れし人は、宮に立ちて民を教え居るなり』26ここに宮守頭、下役を伴い
て出でゆき、彼らを曳き来る。されど手暴きことを為ざりき、これ民より石
にて打たれんことを恐れたるなり。27彼らを連れ来りて議会の中に立ていた
れば、大祭司問いて言う、28『我等かの名によりて教うることを堅く禁ぜしに、
視よ、汝らは其の教をエルサレムに満たし、かの人の血を我らに負わせんとす』
29ペテロ及び他の使徒たち答えて言う『人に従わんよりは神に従うべきなり。
30我らの先祖の神はイエスを起こし給いしに、汝らは之を木に懸けて殺した
り。31神は彼を君とし救主として己が右にあげ、悔改と罪の赦しとをイスラ
エルに与えしめ給う。32我らは此の事の証人なり。神のおのれに従う者に賜
う聖霊もまた然り』

33かれら之をききて怒りに満ち、使徒たちを殺さんと思えり。34然るにパリ
サイ人にて凡ての民に尊ばるる教法学者ガマリエルと云うもの、議会の中に
立ち、命じて使徒たちを暫く外に出さしめ、議員らに向かいて言う、35『イ
スラエルの人よ、汝らが人々に為さんとする事につきて心せよ。36前にチウ
ダ起こりて、自ら大いなりと称し、之に付随う者の数、おおよそ四百人なり
しが、彼は殺され、従える者はみな散らされて跡無きに至れり。37そののち
戸籍登録のときガリラヤのユダ起こりて多くの民を誘い、おのれに従わしめ
しが、彼も亡び従える者もことごとく散らされたり。38然れば今なんじらに
言う、この人々より離れて、その為すに任せよ。若しその企画その所作、人
より出でたらんには自ら壊れん。39もし神より出でたらんには彼らを壊るこ
と能わず、恐らくは汝ら神に敵する者とならん』40彼等その勧告にしたがい、
遂に使徒たちを呼び出だして之を鞭ち、イエスの名によりて語ることを堅く
禁じて釈せり。41使徒たちは御名のために辱しめらるるに相応しき者とせら
れたるを喜びつつ、議員らの前を出でされり。42斯て日毎に宮また家にて教

をなし、イエスのキリストなる事を宣伝(のべつた)えて止まざりき。

●ゼロ・イコール・無限大

神さまに献げものをするのに資産を売って、幾分を隠しおいて、そしてこれを

「全部だ」

と偽った。ペテロはアナニヤを見て、偽っていることが分かるんです。もう使徒行伝のペテロは本当に魂が澄みきっていますからね。濁ったものは、すぐ映るわけです。福音書のペテロと使徒行伝のペテロはガラリ違う。聖霊を受けているからです。

「偽り」「たばかり」

これは非常に悪い。これが「汚れたる心」。「聖」とか「俗」とかいうけれども、このように、神および人に対して偽ったり企(たくら)みを持ったりすることは一番悪い。「貪(むさぼ)り」の方がまだいい。「偽り」、「たくらみ」というのは本当にいかん。

「これは一部分です」

と、ちゃんと言えばいい。ところが、一部分であるのに、

「全体だ」

という言い方をする。もちろん、献金は、全額を献金することは、特別な場合でなければなかなかないでしょう。

献金のことで、ちょっと思い出しますが、新島襄がアメリカで勉強して、国へ帰る時に、

「自分は日本に帰ったら、キリスト教の学校を建てる」

と――同志社ですね――その演説を最後にやった。そうしたら、

「みんなで助けてやろう」

といって献金をした。何も

「献金してくれ」

と呼びかけたんじゃないですよ。自ずから皆よろこんで献金をした。そういうところは、なかなかアメリカ人はみな伝統的なものを持っている信者ですから。それで、老人で、２マルク出した人がある。その２マルクは、実は帰りの汽車賃なんです。それを全部出してしまった。それで何キロあったか知りませんが、てくてく歩いて帰った。例の

「レプタ２枚」

と同じようなわけですが。そういうことを私は読みましたが、さすがはと思いました。

たとえ一部分であろうと、全額であろうと、献げる気持は全的でなければいかん。人間のすることは、「全的」であるということが大事なんです。質的に全的であるということ。そういう「献金」という気持というものは、

「今日はこれ位にして置こう」

とか、そんな計算的でなくて、とにかく献げる時は、そうでないと。「献金」とは神に献ず

るんだから。私は受けとる時に、必ず自分の部屋で祈って受けとっています。すべて、神に対する気持は、全的であること。

「全的」

ということは、別の言葉でいうと、

「無的」

ということなんです。自分を全部献げていることが、「全的」です。こっちは空っぽなんです。だから、「全」と「無」とは一つなんです。

「ゼロ・イコール・無限大」

私の信仰の質はこれですから。

●献金は献身

使徒行伝の第3章で、ペテロが跛者を立たした時に、彼は空っぽなんです。

「自分の信仰とか何かじゃない。キリストが一切なんだ。自分の信仰の力とか、そんなことを言っているんじゃないんだ」

と。だから、

「何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。」（行伝3・12）

「わが敬虔なる信仰によって立たしたんじゃない、ナザレのイエス・キリストがなさったんだ」

と、あの告白は素晴らしい告白です。だから、

「されど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め。」（行伝3・6）

「わが内に有るもの、即ちキリスト、キリストの力をお前に与える」

と言ったら、生まれつきの跛者が立ったでしょ。我々の信というのものは、混じりけの無いところの――分量じゃない――質的に全的、質的に無的でなければいかん。自分を全部捧げている。「献金」は

「献身」

なんです。身体を献ずること。単なるお金の問題じゃない。人間の魂の在り方の問題。それを、偽った。部分であるのに、全体であるかの如く。本当の部分は全体なんです、質的には。部分において全体をそこに盛り込んでいるような気持でなかったらダメです。その部分が本当の全体でなくなる。全的でなくなる。信仰の世界は、頭で考えられているような世界じゃないですから。それでなければ、聖霊は働かない。

だから、ペテロには、その魂の姿が見える。

「お前は偽ったろう」

と。聖霊は助ける霊であるとともに、審く霊なんです。聖霊の世界は、火の如き審きと、火の如き力をもって助けるという、審判と恩恵とが相即している世界です。これは、旧約からいろいろ調べると非常に面白いけれども。

「何故なんじの心サタンにて満ち、聖霊に対し偽ったか」

と。だから、

「人に対してに非ず、神に対して偽った」

んです。これはもう聖霊の審判きの言葉ですから、この言葉を聞いてぶっ倒れてしまった、死んでしまった。恐ろしいね。「偽った」と言われた時に、このアナニヤが、

「悪かった」

といって本当に平伏せば、これは助かります。平伏さないで、ただ怖がった。これはダメ。

「自分は間違っていました」

と、最後の瞬間に平伏した盗賊は、キリストと一緒に天界に往ったでしょ。ですから、神・キリストの前に全的に平伏すことが、いかに大事かということ。

「謙遜」

なんてことではない。

神・キリスト・聖霊に逆らっていると、やはり、私に対して何のかのと言っている連中が、大体ダメになっていく。それは――人間小池はどうだっていいよ――私に働いているところの聖霊に対するところの反抗なんです。聖霊の事態に反抗していると、その人はおかしくなってくる。もう気の毒な最後です、二、三人知っています。ですから、キリストが言われたでしょ、

「聖霊に逆らう罪は許されない」

と。聖霊に逆らっても、本当にそこに平伏して、キリストの十字架の前に平伏せば、それは、赦しは来ますよ。

そういうことで、偽ったり、たぶらかしたり、企(たくら)んだり、それから抜けていかなくては。そういう人間のいろいろな罪過的な現象の奥は、要するに、「自我」ですからね。

●キリストに帰る

「その自我を全部、もう私は引き受けた。心配要らんぞ」

というのが、十字架ですから。過去の小池も現在の小池も未来の小池も、これは完全に贖われている。相対的人間小池がどうである、そんな事ではない。それだけの贖いを、私は全的に受けとっていますから。だから、み霊の力が来るんです。人間はね、躓いたり、転んだり、左へ行ったり右へ行ったり、いろいろしますよ。そんな事は、ゴタゴタ自分でもって整理する必要はない。常に新しく帰る、キリストに帰る。そうすれば、

「どうも今までこうだった、まだ聖書をよく読んでない」

と、何のかんのと、そんな事を計算する必要は一つもない。いいですね。あなた方の魂がはっきりしてもらいたい。キリストの直弟子のペテロ、パウロ、ヨハネ、その次元でなければ、承知しない私ですから。私はこの大先輩を本当に友達のように考えて、ありがたく進んでいるわけですから。今日は、新しい方もありますが、どうぞ、単に驚かないで、

「こういう凄い世界だ、そこが本当の力の世界だ、本当の光の世界だ」

ということを受けとっていただきたい。「頭」で聞いてはダメですよ、「身体」で聞いてくださいよ、全存在で。

サッピラという奥さんもやって来て、同じ偽りをやった。これもぶっ倒れてしまった。み霊の審判に会った。これは非常に著しい記事ですね。

ペテロ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、みんなこれは、キリストの使徒達は同時に

「聖徒」

であるわけです。「聖者」とは言いません。聖霊を受けた者は「聖徒」なんです。私たちは聖徒なんです。この「聖」という字は――「聖書」「聖なる書」とも言う――ヘブライ語では「コーデーシュ」とも言うんですけれども。形容詞だと「カーデーシュ」と言う。これは、

「荘厳なるもの、畏れかしこむもの、畏るべきもの」

という意味を持っている。

「荘厳」「畏れ」「栄光」

という概念と結びついている。だから、

「聖なるかな、聖なるかな、万軍のエホバ」

と、イザヤ書の6章のところに出てくる。イザヤ書は旧約の大事な書ですから、非常に「聖」の字がたくさん出てくる。エホバの神さまのことを

「聖者（しょうじゃ）」

という。聖なる者。この聖者に面と向かうと、ぶっ倒れる、死ぬとまで言われている。モーセはそれで死ななかった。彼は本当に平伏していたからでしょ。平伏さなかったら、ダメですよ、とにかく。いい気な気持でもって神さまを眺めていたら、ひっくり返されてしまう。キリストは、

「その神を愛せよ」

と言っているんですから。

「心を尽くし、力を尽くして、汝の神を愛せよ」

と、これは旧約にある言葉ですから。どうして愛せるかは、だんだん申しますけれども。

●無即無限無量

この畏（おそ）るべきものに――恐がるという意味じゃないですよ、「畏れかしこむ」です――この「畏（おそ）れる」という言葉のもとは

「平伏し」
なんです。平伏さなければ、この「おそれる」は本当の「おそれる」じゃない。「平伏し」は、
「無」
の世界なんです。自分を何者ともしない。キリストがしょっちゅう神さまに対して平伏している。だから私は、キリストのことを
「無者」
という。そうすると、キリストはどうしているかというと、無者になるというと、
「無限無量」
なるものが入って来る。だから、神の無限無量なるものが入って来るから、
「無即無限無量」
ということになる。
「０＝∞」（ゼロ・イコール・無限大）
ということになる。だから、
「我を見し者は父を見しなり」
とキリストは言われた。我々は本当に平伏していれば、
「我を見し者はキリストを見しなり」
と言えるんですよ。
「私を見た者は、キリストを見たんだ。我がうちなるキリストを見よ」
と。これは平伏していなければ、ダメだ。
「俺はだいぶ信仰が強くなったから、聖霊の力があるようになったから」
なんて思ったら、大間違いだ。そんなことしていると、霊的傲慢になって、サタンになる。
「無」において聖霊は働くんだから。いいですね。私の「無」はとても普通のクリスチャンには分からない。「虚無」かと思っている。冗談じゃない。キリストがなさった、十字架を通して、その姿を賜っているから、賜りたる無なんです。
「段々悟って無になりました」
という禅宗の無とは違います。坐禅なんか組む必要ないんだ、平伏していればいい。坐禅は本当はご苦労さまな話だ。別に、坐禅をけなすわけじゃないけれども。あの聖道門というのは大変ですよ。だから、福音なんですよ、これ。キリストの福音というのは大変なもんだ。喜びの音信というんだ。
「どこがうれしいんですか、キリストの言葉は烈しくてしょうがなくて、どうにもならないではないですか」
と。
「キリストの中に入れば、その烈しさが自分の中で燃えてくるぞ」
ということ。だから、

「**ここは聖なる所だから、サンダルを脱げ**」

と、出エジプト記の3章でモーセが神さまにでっくわした時に、火が燃えている。けれども、柴がちょっとも燃え尽きない。霊的な火が燃えている。

「**ここは聖なる所だから、お前は靴を脱げ**」

と。栄光が現れている、聖なる所で――火だからね、火だとか栄光とかいう――平伏すと、その光が自分の中に入ってくるんです。光の存在に変えられる。そこを間違えては困る。平伏して終りじゃないんだ。入らなければ。キリストは、しょっちゅう、それでもって神さまを現象しているわけだ。

●神の活字

だから、御言も御業も、福音書は片っぱしから凄いでしょ。新約聖書には無駄がないよ。旧約には無駄があるけれども。旧約はまだ歴史的な展開の段階だからね。キリストが現れた新約というのは、それからそれを受けとった使徒達の言葉には無駄がない。全部、天来の言葉です。福音には、新約聖書には、どんな思想も、どんな哲学もかなわない。ただ勿体ぶって読むんじゃないですよ。

「**お前達はキリストの書(ふみ)だ**」

「活きた文字になれ」

と、正に「活字になれ」ということだ。「活字」とは素晴らしい言葉だ。

「私は活字でござい。神の活字でござる」

と。私たちは何か「聖」というと、

「いや、こっちはとても汚らわしくて、聖とは関係ありません」

と、そう思う。けれども、この聖の世界に、「無」で入れる。「無」は十字架で贖いたる無だから、無の中に聖が入って来る。だから、我々は「聖徒」なんだ。相対的にはしょうがない者でもいいですよ、けれども、その根底においては聖徒である。この自覚を持たなければ、ダメなんです。

「なかなか聖(きよ)まりませんが」

と、よく聖(きよ)め（聖潔）の人は

「聖(きよ)まる、聖まる」

と言うが、「聖まる」じゃない。聖霊が入ってくるんで、何も、相対的に聖まるの聖まらないのと、そんな事を考える必要はない。

「まだ聖め方が足りません」

なんてやっているんだ。また新しい宗教道徳になってしまう。くだびれてしまうんだ、しまいに。神経がおかしくなる。私のその気合が分かりますか。喜びというのは、本当の喜びの世界ですから。何と替えることができるかと。

そういう調子で、聖書の中から、内側から、私が告白するから、25、26人の牧師さんたちに一遍話したら、牧師さんたちは正直、私に参ったですよ。

「今日は参りました！」

と。聖書を「研究」して、聖書について語っていたって、ダメなんだ、そんなのは。中から迸るように言うことができるような現実にならなかったら。

●徴と不思議

12 使徒たちの手により多くの徴と不思議と民の中に行われたり。

いやぁ、全くそうなんだ。

「徴と不思議」

これはペテロもパウロもヨハネも、これをみんなやる。大展開をしていく。手島さんや私を通して、「徴と不思議」が現れたんだ、正直。無教会からサヨナラした。無教会は一つもそれできなかったからね、内村鑑三といえども、藤井武といえども、矢内原といえども。悪口を言うわけじゃないよ。先生方はそれぞれの役割を果たしました。けれども、塚本先生は言いました、私に。

「私の伝道は間違っていたよ。手島君と小池君のは本当だ」

と。これは遺言ですよ、塚本先生の。それから先生は十年間おかしくなってしまった。先生が本当に聖霊を受けていれば、あんなにおかしくならなかったと私は思う。本当はお気の毒なんだ。あれだけいろいろ勉強もなさり、イエス伝では日本で第一流のものを書かれたのだけれども。それでも、なお一つを欠く。み霊の世界が欠けている…（異言）…。

このみ霊の世界は、そんな単なる研究で書けるものじゃない。

「わが名の故にすべての人に憎まれん」

と、私は憎まれても一向に差し支えない。もうキリストが味方なら、何も要らん。祈りは、それだけ、

「主さま！」

と言って、全身を投げ入れてください。何も祈らなくてもいいんだ、「主さま！」だけでいい。一番大事な祈りなんだ、これは。

「父よ！」

とキリストが言われた。私は、「主さま！」だ。キリストが私の救い主だから。キリストは、「かく祈れ」と言って、

「天にまします我らの父よ……」

と。教会ではしょっちゅうそんなことを言っている、空念仏で。キリストは、「父よ」だけれども、

「お前たちは、本当は、私だよ」

と、そこまでキリストは仰らなかったけれども、そうなんだ。

「我によらずば何ぴとも父の許に行くことができない」

と言っておられるからね。まぁいいです、「お父さま」と祈ったって何だって、キリストと一つになっていれば。「キリスト・聖霊・神」これは本当に一つ。パウロが「キリスト」と言おうが、「神」と言おうが、「聖霊」と言おうが、パウロには必ずこの三つが一つになっています。祈りの呼び方は、みんなそれぞれで結構です。私は、そんなことは何も言いません。

彼等はみな心を一つにして、ソロモンの廊にあり。13他の者どもは敢て近づかず、民は彼らを崇(あが)めたり。14信ずるもの男女とも増々おおく主に属(つ)けり。

「崇める」必要はないんだけれども。「信ずるもの」なんていったってね、これは、信ぜざるを得なくなるんです。自分で「信ずる」じゃない。信ぜしめられる、圧倒されるから。

「私は信じました」

じゃないですよ。

「信ぜしめられました、参りました！」

という全部、受け身ですから、上からの力の。こっち側から何かしているなんて思ったら大間違いです。

私は新約聖書でも、もっとはっきりと自分の訳を作りたいくらいだ、時間があれば。

「それは訳でない」

と言われたら、

「訳ではない、訳の奥の訳だ」

と、そう言ってやる。

15終(つい)には人々、病める者を大路にかききたり、寝台または床(とこ)の上におく。此等のうち誰にもせよ、ペテロの過ぎん時、その影になりと庇(おお)われんとてなり。

大変なもんだね、これは。ペテロの影が映れば、それでもって治ってしまう。本当ですよ、これは。キリストの裾にすがったら、血漏が治ってしまったでしょ。

「自分から力が出た」

なんてキリストが仰ったでしょ。こういう事は本当の凄い現実なんです。

「そんな事があるか」

なんて読んでいる人は、いつまでたってもダメです。

「いやぁどうも凄い現実だなぁ」

と。摩訶不思議な事を言っているんじゃないですよ。聖霊の現実の凄さをいっている。マルコ伝の5章にも出ています。

16又エルサレムの周囲の町々より多くの人々、病める者・穢(けが)れし霊に悩まされたる者を携えきたりて集いたりしが、みな医(いや)されたり。

●聖霊の行伝

全部、ペテロを通した聖霊にやっつけられた。救われた。とにかく、使徒行伝というのは凄い。だから、無教会の人には使徒行伝が読めないんです。私の藤井先生といえども読めなかった。ただ「行い」じゃないんだよ、「行伝」なんていう書き方はあまり好きじゃないんだけれども。これは聖霊の行伝なんです。もちろん、聖霊による行伝ですけれども。言葉でも、業でも、全部、力を持っている。まぁとにかく、新約聖書には参るね。参ると、その中に入るんですから。参ったきりじゃない。参ると、その中に入って、もう力が来て生命が来てしょうがない。

私に初めて会う人は皆びっくりするんだよな。

「87才にもなって、なんでそんなに元気か、水泳ですか？」

と。水泳じゃない。

「しょっちゅう自転車で乗り回している、それですか？」

それでもない。それは現象の一つに過ぎない。

17**ここに大祭司および之と偕なる者、即ちサドカイ派の人々、みな嫉（ねたみ）に満**
たされて立ち、18使徒たちに手をかけて之を留置場に入る。19然るに主の使、夜、
獄（ひとや）の戸をひらき、彼らを連れ出だして言う、20『往きて宮に立ち、この生命
の言をことごとく民に語れ』21かれら之を聞き、夜明がた宮に入りて教う。
大祭司および之と偕なる者ども集いきたりて議会とイスラエル人の元老とを
呼びあつめ、使徒たちを曳き来らせんとて、人を牢舎（ろうや）に遣したり。22下役ど
も往きしに、獄のうちに彼らの居らぬを見て、帰りきたり告げて言う、23『わ
れら牢舎（ろうや）の堅く閉じられて、戸の前に牢番の立ちたるを見しに、開きて見れば、
内には誰も居らざりき』24宮守頭（みやもりがしら）および祭司長ら、この言を聞きて如何にな
りゆくべきかと、惑いいたるに、25或人きたり告げて言う『視よ、汝らの獄
に入れし人は、宮に立ちて民を教え居るなり』26ここに宮守頭、下役を伴い
て出でゆき、彼らを曳き来る。されど手暴（てあら）きことを為（せ）ざりき、これ民より石
にて打たれんことを恐れたるなり。27彼らを連れ来りて議会の中に立てたれ
ば、大祭司問いて言う、28『我等かの名によりて教うることを堅く禁ぜしに、
視よ、汝らは其の教をエルサレムに満たし、かの人の血を我らに負わせんとす』
29**ペテロ及び他の使徒たち答えて言う『人に従わんよりは神に従うべきなり。**

「お前さんたちの言う事なんかを聞けるか、私たちは神さまに、キリストに従って行動しているだけのはなしだ、天使が来て出してくれた」

と。使徒たちは天使を拝みはしませんよ。これは神さまの使いだから、別に拝む必要はない。

「人に従わんよりは神に従うべきなり」

と。こと、信仰のことに関したら、敢然として戦っていかなくてはいかん。この世で生活

するには、いろいろ人に従わなければならない場合もあるでしょう。けれども、信仰の左右されるような事柄に対しては断然これは拒否しなければいかん。女の方も、そういうことは強くなければダメですよ。キリストの力が抜けてしまうからね、人になんか従っていると。魂の世界はゴマかしがきかないからね。どんなに言葉で言い聞かしたってダメなんだ、現実を持っていなければ。

30 **我らの先祖の神はイエスを起こし給いしに、汝らは之を木に懸けて殺したり。**

「モーセ、モーセ」と言っているんだからね、イスラエルの連中は。今でもユダヤ人はそうだもんな、モーセだもんな。律法、トーラーだ。モーセじゃないんだよ、キリストなんだ。大変な人です。モーセの十言の本当の奥の世界を、山上の大告白は語っておられる。キリストは旧約聖書の大事なところは、自分の預言として、ちゃんとつかまえてしまっているんです。それをみんな成就してしまった。だから旧約は要らない。ドイツ語で

「アウフヘーベン」（止揚、揚棄）

という。本当の意味で律法を満たしてしまった。律法を廃棄する、超律法の世界です。

●天的必然が本当の自由

31 **神は彼を君とし救主（すくいぬし）として己が右にあげ、悔改（くいあらため）と罪の赦しとをイスラエルに与えしめ給う。** 32 **我らは此の事の証人なり。神のおのれに従う者に賜う聖霊もまた然り』**

この31節は大事な節だ。「君」という字は「アルケーゴス」という字で、それを始めた人という、「創造者、創始者」という意味です。「アルケー」という字は「初め」という字ですから。「救主」は「ソーテーラー」。

ペテロが言った、29節の

「人に従わんよりは神に従うべきなり」

の「べき」という言葉は非常に強い言葉です。

「どうしても神に従わなければならない。従わざるを得ない」

のだと。この「デイ」というギリシヤ語は「ざるを得ない」と訳した方がいい。道徳的な判断の「すべし、すべからず」ではない。

「かく為（せ）ざるを得ない」

という在り方が、これが本当の在り方なんです。自然現象と同じです。風が吹けば、木の葉は揺れざるを得ない。揺れなければならないではない。必然なんだ。自然界の必然は、これは自然的必然。霊界の必然は、天的必然。私たちはこのみ霊にあって、天的必然で動かなければ。天的必然が本当の自由なんです。

この天的必然は、完全にこれに従っているから、これをルターが

「奴隷意志」

と言った。神さまに奴隷意志になると、それは天的必然で動いている。エラスムスは、人間的自由でもって、道徳的な哲学的な自由を言った。それは、相対的な世界では、この自由にも或る一つの真理性はあるけれども、次元が違う。こっち（天的）の必然が、本当の自由なんです。ルターが

「クリスチャンの自由」

と言ったのは、これの方なんです。絶対者に従うということが、絶対な自由を持っているということ。

だから、楽でしょうがない、ガンバル必要がない。天的必然で動くから。よく

「ガンバレ、ガンバレ」

と言うが、私に「ガンバレ」なんて言ったって、私はガンバラないですから。私はガンバラないよ。人間的なガンバリなんかしたってしょうがない。天的必然で動いている、もの凄い力で。聖霊が働くからね。聖霊が働くところが天的必然です。

女の方も生き生きとしてくださよ。何でも、やる事は全的でなければダメなんです。私のこんな烈しい言葉を、あなた方は楽しく聞いていますか。楽しくなければウソですよ。

「おっかないな」

なんて。ちっともおっかなくない。私は、楽しんで話しているんだ。

●キリストに圧倒されて生きている

「神は彼を君とし救主（すくいぬし）として己が右にあげ、悔改（くいあらため）と罪の赦とをイスラエルに与えしめ給う」

「悔改」とは、「回帰」、めぐり帰るということ。ただ「悔い改め」ではない。神・キリストに回帰する、全存在で回帰するということが「悔改」ということ。帰って入る、「帰入」する。祈り入る、「祈入」する。みんな同じです。入らなければダメなんだ、外側では。だから、パウロが、

「我れキリストの中に、キリストわがうちに」

とさんざん言っている。これは「中」の世界だから。だから、私の雑誌は、

「エン・クリスト」（キリストの中に）

と言っているんだ。「キリストの中に」。外ではない。仰いでいるのではない。「信仰」の「仰」の字は、「交」わる、

「信交」

と書かなくてはダメ。交わる世界だ。「我れ汝のうちに、汝わがうちに」と。

「我らは此の事の証人なり」

と。まったく見た。見たばっかりじゃない。この聖霊を受けたから、証人なんですよ。「証人」

とは「目撃者」という訳もある。目撃だけではダメです、これは見ただけでは。キリストの復活を見ただけではダメなんです、復活の生命をいただかなければ。

私は無教会に居た時に、そういう角度のことを聞かないんだよな。

「信仰、信仰」

と言ってさ。

「信仰のみ、信仰のみ」

と。塚本先生は、あれは言い過ぎた。「信仰」なんて、くたびれてしまう。交わる世界なんだ。逆に私は、

「信仰なんか有りません。圧倒されて生きているだけです」

と言う。あなた方は本当に圧倒されていますか、キリストに。「自分の信仰」をサムシング（何ものか）なんかに思ったらダメですよ、絶信しなければ。ところがキリストが、

「汝の信仰、汝を救えり」

なんて仰るものだから、さぁ困った、あの言葉は。「汝の信仰」というと、信仰がサムシングのように思う。そうじゃないんだ。

「お前が全的に私によりかかったことが、私を全的に受けとったことが、それがお前の救いとなったよ」

ということなんだ、「汝の信仰」というのは。そうするとまた、キリストが

「信仰うすき者よ」

なんて仰る。あれ、キリストは困ったもんだな、言い方が。ああいうところは直さなければいかんな（笑）。本当だよ、あれは人を躓かせるよ。

「まだ私は信仰が薄いものだから、これを厚くしなければいけません」

なんて。くたびれてしまうよ。私は、なぜくたびれないかというと、そういう世界に入るから、居るから。くだびれない。普通の人は、塚本先生も、

「私は、日曜日の集会すると後はもぬけの殻みたいにくたびれる、月曜日はもぬけの殻だ」

と言った。私は「もぬけの殻」どころじゃない。集会を終わると、荷電されているから、荷霊されているから、いよいよもって力が来てしまって困る。月曜からの週日を突走っていく。何も、月曜も火曜も、みんな日曜と同じだよな。そういう祈りをしてますか、本当に、皆さん。祈入、入らなければダメです、キリストの中に。

「あれがキリストの中に入ったから、私は入れない」

と、そんなことではない。みんなが入れるんだ、一人一人が。キリストという霊の世界は、霊の神秘というのはそういうものですから。自然科学的な計算とは違う。

●聖霊の中から

33かれら之をききて怒に満ち、使徒たちを殺さんと思えり。34然るにパリサイ人にて凡ての民に尊ばるる教法学者ガマリエルと云うもの、議会の中に立ち、命じて使徒たちを暫く外に出さしめ、議員らに向かいて言う、35『イスラエルの人よ、汝らが人々に為さんとする事につきて心せよ。36前にチウダ起こりて、自ら大いなりと称し、之に付随う者の数、おおよそ四百人なりしが、彼は殺され、従える者はみな散らされて跡無きに至れり。37そののち戸籍登録のときガリラヤのユダ起こりて多くの民を誘い、おのれに従わしめしが、彼も亡び従える者もことごとく散らされたり。38然れば今なんじらに言う、この人々より離れて、その為すに任せよ。若しその企画その所作、人より出でたらんには自ら壊れん。39もし神より出でたらんには彼らを壊ること能わず、恐らくは汝ら神に敵する者とならん』

「もし神より出でたらんには」の「神より」は、「エック・テウー」と言って、この「より」はギリシヤ語では「エック」という。「エック」というのは「あるものの中から」という時に使う。ドイツ語の「アウス」、英語の「アウト・オブ」なんです。

おなじ「から」でも、もうひとつの「アポ」というのは「その正面から」という時に使う。「から」でも違うんです。「アポ」はドイツ語の「フォン」、英語の「フロム」なんです。「神より」という訳が少し弱い。

「神の中から出たならば彼らを破ることができない」と。私の言葉は聖霊の中からものを言っているから、これを破ることはできません。いわゆる「お説教」をしているんじゃないから。頭で考えて言っているんじゃない。

ガマリエルの39節のこの言葉は非常に大事な言葉ですね。

40彼等その勧告にしたがい、遂に使徒たちを呼び出だして之を鞭ち、イエスの名によりて語ることを堅く禁じて釈せり。41使徒たちは御名のために辱しめらるるに相応しき者とせられたるを喜びつつ、議員らの前を出でされり。42斯て日毎に宮また家にて教えをなし、イエスのキリストなる事を宣伝えて止まざりき。

盛んなる哉なんだ、このペテロは。使徒行伝の3、4、5章はもっぱらペテロのこと。ペテロ前書4章12節を見ると、

「愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、反ってキリストの苦難に与かれば、与かるほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも楽しまん為なり。もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」（ペテロ前４・12～14）

素晴らしい言葉です。このペテロ前書４章は使徒行伝第５章の所にちょうどふさわしいところです。

●無者が本当の聖徒

『ファウスト』の中に、

「苦しみの後に喜びがあり、喜びの後に苦しみがある」

という言葉があるけれども、福音の世界では、苦しみの中に喜びがある。後ではない。ベートーベンもダンテも、あの苦しみを通して、苦しみの中で力をいただいて、

「喜劇は終わった」

という。

「皆、歓呼せよ、喜べ」

という。ベートーベンの第九シンフォニーのあのシラーの言葉は、本当はまだ足りないけれども。ベートーベン自身が、福音的な言葉を吐いた方がいいくらいだ。私は詩の中で烈々と叫ぶから。

我々は聖徒であるというのは、この「聖」の字は、「聖徒」であることは、我々は本当にキリストの十字架で

「無者」

となり、聖霊をいただいて

「無限無量者」

である、その現実が即ち「聖徒」の現実なんです。なにも新しいことを言っているわけじゃない。「聖徒」という言葉を我々は新しく把握していいわけです。本当の無者であることが、本当の聖徒であること。この「聖い」という字にこだわらないようにしてください。全的であるということ、無的であるということ。質的に全的であること。

それで、使徒たちは質的に全的だものだから、アナニヤとサッピラが部分的なものを、そして偽っているから、ぶっ倒された。凄いところだね、５章は。

ガマリエルとペテロとは次元が違うですよ。ペテロの方がもちろん上です。ガマリエルはそういうことの、とにかく、一応分かる人だよ。彼自身は聖霊の世界には入っていない。まだ旧約だ。旧約だけれども、ガマリエルというのは、ちょうど新約と旧約の間にいるような人だ。パウロはこのガマリエルについて学んだんだからね。優等生なんだ、パウロは。

●キリストの現実に在りて

ヨハネ伝17章11節を見ると、

「今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。これ我等のごとく、彼らの一つ

ならん為なり。我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。」（ヨハネ17・11～12）

「御名の中に彼らを守りたまえ」と。御名の中に入らなければダメです。だから、「御名に在りて」と言う時には、

「御名の中に在りて」

ということ。我々は祈る時に、「御名によりて」じゃないですよ。「御名に在りて」ということは「御名の中で」ということ。「御名」というと、皆ただ「名」だと思っているが、ただ「名」じゃない。「実」なんです。

「主の御名に在りて」

ということは、

「主の中で」

ということと同じです。「御名」なんて言わなくたっていい。「主さま」とか「父よ」と呼ぶことが、御名なんです。「父」だとか、「主」だとかいうのが、御名なんです。ただ「イエス」ばっかりが御名じゃない。

「イエス・キリスト」「主」「救主」

何でもいい、みな同じことなんです。何と言おうがいい。とにかく、それがみな現実。「御名に在りて」ということは、

「キリストの現実に在りて」

ということと同じこと。御名というのは実名だから、現実なんだから。御名の現実においてということ。なにしろ、自分でもって、

「これは本当の現実だ」

ということを実感するまではダメですよ。実感するまではダメ、ただマネしていたって。

●四位一体

「これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在（いま）し、我なんじに居るごとく、彼らも我らに居らんためなり。」（ヨハネ17・21）

しきりに、

「一つ、一つ」

と書いてある。ヨハネ伝の17章は、「神・キリスト・我ら一人一人」が一つになることを、どんなに祈ったか分からないんだ。「信ずる」なんて書いてない。「一つ、一つ」と書いてある。「一つ」が分からなかったら、ちゃんと図を書いてやるよ（四つの内接円を描く）。

「神・キリスト・聖霊・我」

という四位（よんみ）一体。こういうような内接円。私は今、チョークを離さないで書いた。三位一体なんて言ったてダメですよ、四位一体にならなければ。これが

「一つとなる」

ということ。四位一体は、キリストがヨハネ伝17章でさんざん言ってらっしゃることだ。これを「大祭司の祈り」というね。

こういうところを読みながら、読むことが直ちに祈りにならなければダメですよ。皆さん、夜祈る時に、大事なところを読んで、読みながら、それがもう直ちに祈りになる。

「もう祈りは終りました」

と。読んでから祈るんじゃないんだよ。読むこと即祈り。

もう私はあんまり簡単で困るね。本当の世界は非常に簡単なんです。最後には何も言うのがいやになってしまう。沈黙は無限の言葉である。

「聖」はギリシヤ語ではもちろん「ハギオス」ですけれども。「聖霊」は「プニューマ・ハギオス」という。無的、全的、そこの世界が本当に聖の世界だということを、今日は、むしろ非常に新しい表現で私は皆さんに言いました。

「無的全的」

これが即ち聖の世界である。何もかしこまる必要はない。

そういうペテロが、どうですか、「無学の凡人」であるという。学問も何もないただ人だと。凡人だと。聖凡一如なんです。あるいは、聖俗一如と言ってもいい。

「廓然無聖（かくねんむしょう）、枯木竜吟（こぼくりょうぎん）」

という。本当の聖の世界は「無聖」という。聖だとか俗だとか、そんな区別しているうちはまだダメだと。善悪なんて言っているうちはまだダメだ。超善悪の世界。

分かりますか。絶対の世界というものは、相対的判断を越えてしまうんですから。一切を包摂してしまう。ただ偽りだの、傲慢だのは出してしまう。そうでないものは、全部包摂して溶かしてしまう。

愛は一番の力を持つ。手島さんが「聖霊の愛」と言ったのは至言です。「救う」という言葉よりか、「愛」という言葉の方がやっぱり究極の言葉になるね。神の愛に、キリストの愛に圧倒されるから、愛せざるを得ない、ということですから。西郷南洲の、

「敬天愛人」

というのも、本当に天を敬しなければ、本当の愛は来ない。「敬天」というような言葉では、まだ弱いですけれどもね、本当は。

今日は、あなた方は聞いていて、身体で聞いていましたね。そうしたら、全身に力が来たでしょ。

「全身に力が来て楽しくてしょうがない、大歓呼だ」

というのでなかったら、集会は集会じゃないんだよな。